神護山
金藏院

神鏡山東曼荼羅寺金藏院本堂全景

神鏡山
東曼荼羅寺

金藏院

目次

金藏院の宗旨と教え――4
開山・勝覺法印――5
金藏院の歴史――6
草創とその背景
勅願寺・祈願寺
関東十一檀林
徳川家康の信施
門末二十五か寺
道本上人よりの寄進状
院室兼帯
江戸幕府崩壊
明治新政府の樹立
関東大震災からの復興
空襲禍による焼失
現在の寺容
庶民信仰と金藏院――16
阿弥陀如来
虚空蔵菩薩
修行大師像
新四国・玉川八十八か所霊場巡拝
地蔵菩薩
金藏院雑記――18
金藏院略年譜――20
金藏院への径――24

表紙版画・小塚博

主な参考文献
『江戸名所図会』『新編武蔵風土記稿』『武蔵史料銘記集』『郊遊漫録』『金川砂子』『江戸幕府寺院本末帳集成』『東寺長者補任』『本朝高僧伝』『寛政重修諸家譜』『相州古文書』『神奈川叢書』『神奈川文庫』『神奈川県橘樹郡案内記』『武蔵国史蹟総覧』『横浜叢書』『武相史蹟名勝総覧』『武相叢書』『横浜の今昔』

金藏院歴代法印

歴世	法印名	寂年
開山	勝覺大僧正	大治四年四月一日
	惠賢法印	
	良壽法印	
	俊雅法印	
	榮譽法印	
	覺譽法印	
	賢譽法印	正保四年十月六日
	賢智法印	万治三年
	秀整法印	寛文十年七月八日
	秀禪法印	
	辨良法印	
	昌榮法印	
	慧照法印	
	慧鏡法印	
	榮照法印	元文五年八月七日
	玄照法印	宝暦三年十月卅日
	快秀法印	
	榮興法印	
	晃尊法印	天明二年九月廿四日
	辨龍法印	
	快映法印	□□□年七月二日
	觀峯法印	享和三年二月十五日
	快說法印	
	永信法印	
	範瑞法印	
	祐山法印	
	精範法印	
	戒範法印	
	澄尊法印	
	明光法印	嘉永二年二月廿七日
	憲壽法印	安政四年七月廿一日
	憲住法印	明治九年八月六日
五十一世	憲應法印	明治廿年七月十八日
五十二世	憲昌法印	
五十三世	隆壽法印	昭和七年五月廿一日
五十四世	寛悅法印	昭和廿年五月廿九日
五十五世	隆敞法印	昭和五十八年十二月十四日
五十六世	隆弘（現董）	

ご本尊・阿弥陀如来像

金藏院の宗旨と教え

宗旨

金藏院の宗旨は、真言宗智山派です。

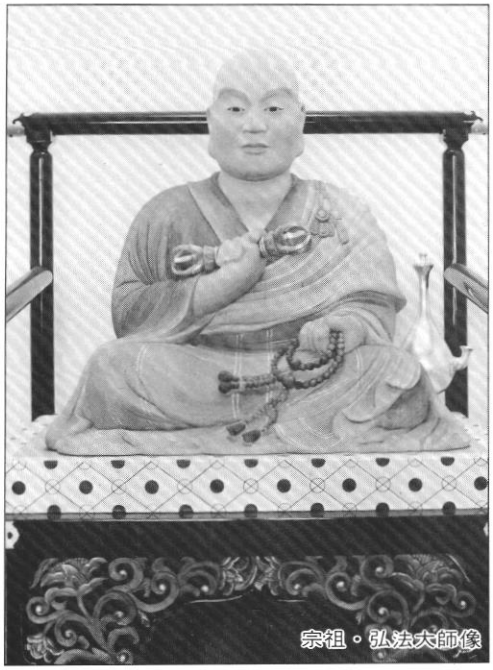
真言宗の根本仏

真言宗の根本仏は、大宇宙の真理をあらわす大日如来さまです。

金藏院の本尊さまは、この大日如来さまの別徳をあらわす阿弥陀如来さまです。

教えの伝承

真言宗の教えが日本に伝承されたのは、今からおよそ一、一八〇余年前、弘法大師さまが唐の国に渡り、唐の都の長安(現在の西安)の青龍寺で、真言密教第七祖の恵果阿闍梨さまから、真言密教の奥儀を授けられたことに始まります。



宗祖・弘法大師像

弘法大師さまは、大同元年(八〇六)に、在唐二か年で帰国され、翌二年に平城天皇に謁して密教をひろめる勅許をいただいています。

弘仁九年(八一八)、高野山に金剛峯寺を建立し、真言密教の修行の聖地とし、さらに弘仁十四年(八二三)、京都の東寺を賜って教王護国寺と改め、密教根本道場として真言宗の教えをひろめました。

教えの中心

弘法大師さまは

「この法は即ち仏の心、国の鎮めなり。氛を攘い祉を招くの摩尼、凡を脱し聖に入るの嘘径なり」

——『性霊集』巻五所収——

とのべておられますように

如実知自心

(ありのままの自心を知ること。ありのままの姿が即ち仏である)

密厳仏国土建設

(平和な福祉国家の建設)

即身成仏

(誰れもが仏性をもっているから、この身このままが仏)

ということです。

開山・勝覺法印

開山・勝覺法印は、天喜五年（一〇五七）、村上天皇（六十二代）の後裔にあたる、左大臣・源俊房の第三子として京に生まれました。

幼い頃から資性柔順で、仏門を慕い、醍醐寺座主・定賢法印に師事して灌頂を受け、応徳三年（一〇八六）六月、定賢法印のあとを受けて、醍醐寺十四代の座主となり、さらに同年七月、義範法印に伝法灌頂を受けて奥旨を究めています。

寛治元年（一〇八七）、勝覺法印は堀河天皇（七十三代）の勅命を受けて当山を開創するとともに熊野三社大権現を創建し、当山をその別当としました。

勝覺法印は、嘉保三年（永長元年）（一〇九六）八月、白河上皇御落飾の戒師となって剃髪を行い、このことから「剃手法眼」とも呼ばれています。

長治元年（一一〇四）、東大寺別当となった勝覺法印は、翌二年（一一〇五）十二月、範俊法印の法流を受け、永久三年（一一一五）十一月、醍醐山西大門の北に一宇を創建しました。これが三宝院です。

定賢法印、義範法印、範俊法印の三法脈にちなんで三宝院と号したと伝えられています。

『伝灯広録中』『本朝高僧伝』によると、天永三年（一一一二）六月、諸国が旱魃に悩んでいることを知った鳥羽天皇（七十四代）は勅命を勝覺法印に下し、神泉苑で「請雨経法」を厳修させたところ、四日目に降雨があったといい、永久二年（一一一四）の旱魃のおりにも勅命によって「請雨経法」を修し、このときも四日目にして降雨があったと記しています。

保安元年（一一二〇）、勝覺法印は大僧都に任ぜられました。

醍醐寺は、勝覺法印の代に至って山上山下の伽藍が整備され、その門下に高僧が続出して醍醐三宝院が興隆しました。その隆昌は延喜（九〇一～二二）、天暦（九四七～五六）年中に勝ったといわれています。

また勝覺法印は醇朴を愛し、朝廷に召されて向かうときでも、檜の笠をかむり素足に草履をはき、わずか二、三人の侍僧を従えるだけであったと伝えられています。

勝覺法印

金藏院の歴史

金藏院は神鏡山東曼荼羅寺と号し、寛治元年（一〇八七）、堀河天皇（七十三代）の命を受けた勝覺法印（『開山・勝覺法印』参照）によって開創された勅願寺で、東曼荼羅寺の号も勅許によるものです。

「抑　神鏡山金藏院八人皇七十三代　堀河帝之勅願寺にて醍醐三宝院宮勝覺大僧正開基にして　寛治年中御草創　忝も東曼荼羅寺の号准勅御許容これあり　一派檀林の随一也」

――『金川砂子』――

かつて、金藏院が別当を兼ねていた熊野三社大権現（現、熊野神社）の旧記によると、寛治元年六月十七日に勝覺法印が、紀伊国（和歌山県）から熊野の本宮・新宮・那智の三社を勧請し、権現山に社祠を創建したと記しています。

平安時代の初期以降（七八一～）の神仏習合時代に、神社の祭祀等は別当寺（神宮寺、供僧寺ともいう）や修験僧が行うことが神社古来の伝統であり、金藏院の開創も熊野三社大権現のそれと同時期であったとみるべきでしょう。

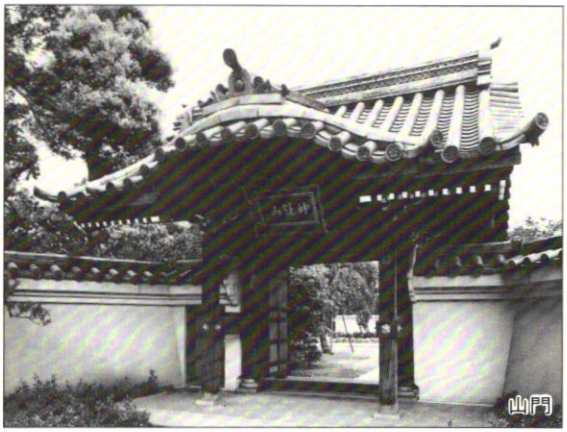
金藏院は勝覺法印によって開創された旧刹ですが、堀河天皇の勅命を受けた勝覺法印が東国へ下ったという史実的な確証はなく、勝覺法印の命を蒙った高弟の一人が当地に赴き、実質的な開創にあたったものと思われます。

金藏院の資料によると、勝覺法印をすべて「開基」と記しています。開基には「寺院を開創すること。また、その僧」の意味もありますが、本来の主意は「ものごとのもといをひらく」ことです。

つまり、「金藏院の基は、勝覺法印によってひらかれた」というのです。

師の定賢法印から法嗣と定められ、醍醐寺十四世となった勝覺法印が、本山を数か月間留守にして東下したとはまず考えられません。『江戸名所図会』には勝覺法印の東下説が載せられていますが、これらは名僧、高僧の遺徳をしのぶ伝承とみるべきでしょう。

永久三年（一一一五）十一月二十五日、勝覺法印は、醍醐寺西大門の北方に一宇を創建しました。これが三宝院で、この時から



山門

金藏院は三宝院と本末関係を結び、直末寺となりました。

勝覺法印が、定賢法印、義範法印、範俊法印の三法脈を継承したことから「三宝院」と号したと伝えられています。

治承四年（一一八〇）八月、伊豆に流されていた源頼朝が挙兵し、石橋山の合戦で一敗しますが海路安房国（千葉県）にのがれ、三浦氏、千葉氏をはじめとする諸将の助力を得て鎌倉に入り、東国政権を樹立しました。そのおり頼朝が熊野三社大権現に戦勝を祈願し、金藏院の住職が秘法を厳修したと伝えられています。

鎌倉時代に入ると経済活動も活発化し、人びとは交易場で必需品を得るようになり、これに伴って神奈川湊が賑わい、金藏院も寺運隆昌の一途を辿ったと推察されます。

金藏院が鎌倉幕府の祈願所となったのもこのころのことでしょう。

『金川砂子』より

信仰と周辺地域の開拓は密接な関わりをもち、この両者の統合によって人びとはさらに統合され、地域の開発と生産性が向上していきました。

建武二年（一三三五）、南北朝の激しい対立の中で、足利尊氏が征夷大将軍となり、再び武家政治を確立します。このおり、南朝側も新田義貞の子らが中心となって尊氏と戦います。この合戦が、いわゆる神奈川の合戦です。

金藏院の面する街道は、俗に「鎌倉道下の道」とよばれ、周辺地域一帯は神奈川湊とともに重要な拠点となっていたわけです。

足利幕府（室町幕府）の基盤が確立すると、神奈川湊は、品川湊、六浦湊とともに賑わい、重要な地方経済の中心となって行きました。金藏院や熊野三社大権現に寄せる人びとの信仰もますます厚くなったことと推察されます。

一方、貨幣経済の発達に伴って、土着の下層武士たちの力が強まり、互いに地縁的

に結合して力を蓄えていきました。これがいわゆる国人衆で地域性に富む小さな争乱が続出しました。

応永五年（一三九八）、熊野三社大権現が山賊に焼かれ、のちに草祠のみが残ったとの旧記が残されていますが、これは国人衆らの争乱によるものでしょう。

このころの金藏院周辺一帯は、関東管領の上杉氏の支配下にありましたが、足利将軍と鎌倉公方との対立。それに加えて上杉氏の家督をめぐる争いや、管領職をめぐる争いが次第に激しくなっていきました。

山内上杉氏の執事（家老職）が長尾顕忠、扇谷上杉氏の執事が太田道灌で、互いに対立しますが、太田道灌は統率力にもすぐれ国人衆の人望も厚く、次第に勢力をもつようになります。

長禄元年（一四五七）、太田道灌は江戸城を築き、金藏院周辺の国人衆を配下におき勢力を大きく広げていきました。

この太田道灌の活躍と時を同じくして、真言宗の教勢が関東に広まっていきます。関東各地に多くの真言宗寺院が中興、または開創されています。その拠点となったのが金藏院と三会寺（港北区鳥山）です。

延徳年中（一四八九～九一）から永正十六年（一五一九）にかけて、「宗祖弘法大師の再来」と尊崇された印融法印が、拡大された教勢をさらに確固としたものにしていきました。

真言宗の関東における檀林は十一（寺）あり、これを俗に「関東十一檀林」といいますが、この十一檀林が充実されたのも、印融法印の功績によると伝えられています。

金藏院が「関東十一檀林」の一つとして確立され、宗勢拡大に大きく貢献するのもこのころ以降のことで、学寮・宝蔵坊の建立もこの頃のことと推察されます（十八頁参照）。

永正七年（一五一〇）七月、北条早雲と手を結んだ上杉朝良の家臣・上田蔵人が、権現山の砦に立て籠もって上杉氏に叛きましたが、十日ほどの戦いで敗れ、熊野三社大権現は再び焼失してしまいました。

密教伝持（伝承）の八祖像（当山所蔵）

熊野神社の『由緒記』によると「明応三（一四九四）年六月、上田蔵人が普請奉行となり、宏壮なる社殿が再建された」と記しています。

上田蔵人が奉行として再建した社祠が、上田蔵人が権現山の砦に立て籠もったことによって、再び灰燼と帰してしまったわけです。転変する戦国時代の様相の一端がうかがえるともいえましょう。

明応四年（一四九五）北条早雲が小田原城に入り、神奈川郷周辺の国人衆を味方に引き入れて次第に勢力を広げ、いらい一〇〇年にわたって関東に覇をとなえます。

この後北条氏の基盤が確立されるのは、三代・氏康のころのことで、記録によると関東の古社旧刹の多くを外護したと記されており、金蔵院にも外護が寄せられたものと推察されます。

永禄七年（一五六四）五月二十三日、金蔵院の両界曼荼羅の修理が完了し、天正五年（一五七七）六月、惠賢法印によって熊野三社大権現が再建されました。年代的にみて後北条氏の外護によるものとみてよいでしょう。

天正十年（一五八二）三月、織田・徳川連合軍によって武田氏が亡び、六月には織田信長が本能寺の変によって自刃します。

堺（大阪府）にいた徳川家康が浜松城（静岡県）に帰りつく間もなく、小田原の北条氏直が甲斐国（山梨県）へ五万の兵を送ったとの報せがあり、徳川家康もこれに対峙すべく八千の兵をひきいて出陣しました。

そのおり金蔵院の住職が秘法を厳修して戦勝を祈願したと伝えられています。

このころ、家康は清和源氏の末裔として徳川氏を名乗り、源頼朝の故事にならって頼朝ゆかりの熊野三社大権現、金蔵院に詣でたといわれています。

しかし、徳川氏と北条氏は戦うことなく和議が結ばれました。家康が甲斐国・信濃国（長野県）の二国を領し、氏直が上野国（群馬県）を領するというものでした。

家康にとってこれ以上の戦果はなく、秘法を修して戦勝を祈願した金蔵院に寺領地

十石を寄進し、いらい、金藏院、熊野三社大権現に寄せる信施はとみに厚くなっていったといわれています。

一般に金藏院の朱印寺領地は、慶長四年（一五九九）に寄せられたとされていますが、これは朱印状が出された時であって、その旨が朱印状に記されています。

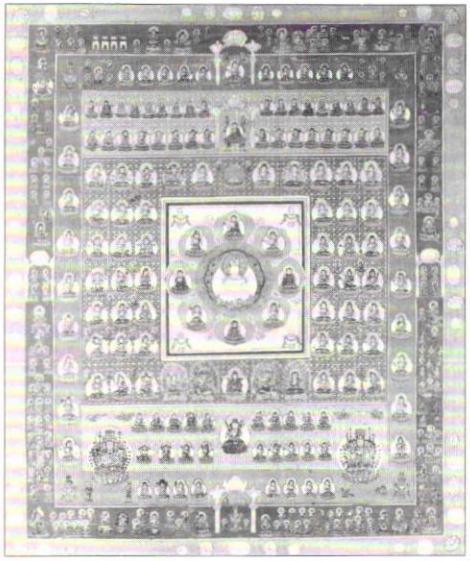
「武州田東之郡小机之庄神奈川之郷金藏院領拾石　先規令寄附畢。寺中不入并竹木不可有相違者也。仍如件。

慶長四年己亥二月十日

（朱　印）」

ここに記された「先規」とは天正十年の寄進をさし、そのときのとおり改めて朱印状が出されたのです。

天正十八年（一五九〇）、小田原城が陥ち、家康が関東八州の領主として江戸へ入部しました。



大悲胎蔵曼荼羅（当山所蔵）

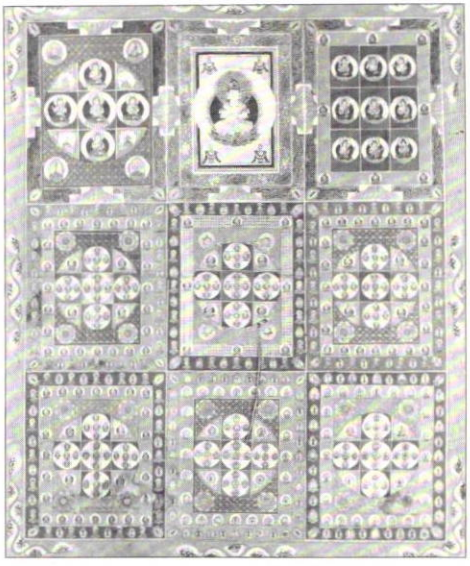
慶長三年（一五九八）に秀吉が歿すると、天下の声望は五大老の一人である家康に集められ、次第に実権を握っていきました。これに危惧をおぼえた石田三成は、家康を除こうとして諸将と策し、やがて関が原の戦いへと発展します。関が原の合戦は、「天下分け目の戦い」といわれ、家康の勝利によって天下の大勢が決しました。

慶長八年（一六〇三）、家康は征夷大将軍となって江戸幕府を開府しました。

翌慶長九年（一六〇四）、金藏院所蔵の両界曼荼羅が八世・秀禪法印によって補修されたという記録が残されていますが、ここにいう八世とは、中興もしくは重興（十九頁参照）より数えての歴世数と思われますが、ではいつ中興（重興）されたのかということは判然としておりません。おそらく印融法印が武蔵国の教勢を確固たるものとした延徳年中から永正十六年（一四八九～五一九）のころではないでしょうか。

慶長十八年（一六一三）五月、幕府は「三宝院法度」を制定しました。全国に散在する真言宗寺院の末寺住職の任免権は本寺にあると強調したもので、のちにこれに類する幕府の宗教統制策が次々と発布されますが、それらの先駆となったのがこの「三宝院法度」で、真言宗の教勢が全国的に盛んであったことを意味しています。

元和元年（一六一五）大坂夏の陣も終わり、名実ともに徳川氏が天下を掌握しました。諸大名に一国一城の制を布くとともに、幕



金剛界曼荼羅（当山所蔵）

府は諸宗を統制すべく「諸宗諸本山諸法度」を定めました。

幕府が各本山を統制することによって、全国の諸寺院や檀信徒の掌握を計ったわけです。本山が末寺の寺領改易にも関与するなどと、本末関係の強化策をいろいろと網羅した、手のこんだ布令でした。

金藏院はあらためて醍醐三宝院と本末関係を結び、末寺、門徒寺二十五か寺を擁しました。

家康は、元和二年（一六一六）に歿しますが、金藏院へは数度訪れ、本堂の前に植えられた紅梅をことのほか寵愛し、江戸城へ赴くおり紅梅の一枝を自ら手折っていったことから、季節になると金藏院の住職が一枝を携えて江戸城へ登り、歴代将軍に献上する慣わしとなっていました。

「国初将軍家数度当寺へ御成有之　庭前の紅梅御寵愛有之　御手折らせ給ひ其梅の枝を以て登城可致事恒例也」

――『金川砂子』――

また金藏院には、将軍が当寺を訪れたおり忘れ物をし、これを住職が追いかけて手渡したところ、将軍は住職の追いかけた道程のすべてを、寺領地として寄進したという話が残されています。ここにいう将軍とはおそらく家康であり、金藏院と家康にまつわる浪漫的な伝承といえましょう。

昭和五十一年（一九七六）まで、神奈川区に御殿町という町名がありましたが、これは慶長十五年（一六一〇）に将軍家の宿泊所が建てられたところで、それまでは金藏院が将軍の宿泊所となっていました。

寛永十七年（一六四〇）、幕府によって寺請制度が公布されます。切支丹（キリスト教）禁圧にともなう宗旨人別改めが重要な目的でしたが、この制度によって檀越関係が確立されました。この寺請制度が近世仏教の庶民への布教に、大きな貢献を果たしたといっても過言ではありません。

承応元年（一六五二）、幕府は年頭祝儀に江戸城へ参上する寺院の制限を行い、古社旧刹、もしくは由緒寺院のみに年頭祝儀の登城を許しました。金藏院もこの中に選ばれ、毎年正月五日に「年始出仕」する慣わしであったと享和三年（一八〇三）の『門末議定連印書』に記されています。

万治二年（一六五九）、秀整法印によって梵鐘が新鑄されました。

梵鐘の新鑄は鐘楼堂の建立をさすととも

に、寺運の隆昌をも意味しています。勅願寺であり、家康公ゆかりの旧刹である金藏院に、多くの人びとの信施が寄せられ、学寮・宝蔵坊では若い学僧たちが勉学に励んでいたことでしょう。

江戸時代も元禄年中（一六八八～七〇三）に入ると、庶民の生活も一応安定し物見遊山をかねた寺社詣でが盛んとなります。神奈川宿も大山詣での宿場として季節になると善男善女で賑わいました。大山詣では途中にある古社旧刹にも参詣するもので、金藏院を訪れる人びとも多かったと推察されます。

正徳二年（一七一二）、権現山の山上が年を経るにしたがって次第に崩壊してきたことから、熊野三社大権現を境内に移し、旧地に小祠を建ててこれを本宮としました。

この権現山は古くから神奈川湊に入る船や、沖をゆく船の目印となっていましたが、今は切り崩され、全くの平地となってしまいました。幸ヶ谷公園や幸ヶ谷小学校周辺がその跡地だといわれています。

享保十九年（一七三四）三月二十一日、弘法大師九〇〇年忌法要が厳修されました。江戸府内外に起こった事がらを年表体に記した『武江年表』によると、真言宗の諸寺院が盛大に法筵を設けたと記しています。金藏院をはじめとする末寺・門徒寺でも、盛大な法筵が設けられたものと思われます。

弘法大師信仰は、宗派を問わず多くの人びとに浸透し、江戸府内に弘法大師霊場八十八か所巡拝路が設けられたのもこのころのことです。四国八十八か所霊場を写したものですが、のちにいろいろな巡拝路が設けられていきました。

享和三年（一八〇三）、金藏院より『門末議定連印書』が提出されました。金藏院住職・祐山法印と末寺八か寺、門徒寺十一か寺の住職が、本末関係の再確認を細部にわたってとり決めたもので、江戸時代における本寺と末寺、門徒寺との関わりを知るうえでの貴重な資料となっています。

文化九年（一八一二）十一月四日、大地震が発生しました。「保土ヶ谷、神奈川大地震」がそれです。神奈川宿の被害は大きく、金藏院も鐘楼堂が倒壊し梵鐘が破損してしまいました。

文政年中（一八一八～二九）の金藏院周辺一帯は天変地異の続出で、年貢の半分は他国から買い入れて納めていたほどと伝えら

『門末議定連印書』（当山所蔵）

後北条氏　戦国時代、小田原に拠って栄えた一族で、北条早雲（伊勢新九郎長氏）を家祖とする。氏綱、氏康は支配圏を関東南半に拡げ、上杉謙信、武田信玄と覇を競った。鎌倉時代の執権・北条氏と区別するため、俗に後北条氏という。

葵紋入漆塗文箱

れ、金藏院も困窮の時代に入っていきます。

この文化・文政時代は、江戸文化が最も花開いたといわれますが、幕府経済の実質が町人に集約され、消費経済が発展したことを物語るもので、反面、幕府、諸大名をはじめとする武士階層の経済力が極度に衰えていたことをあらわしています。

こういった財力をもつ町人層を檀徒家にもつ寺院が、江戸時代を通じて最も隆昌したこともうなづけようというものです。

一方、檀林であり、徳川家の祈願所でもあった金藏院も、一時期からみれば寺運が衰微していたことはいなめません。かつては二十五か寺を擁した末寺、門徒寺が十九か寺に減少しているのも証左の一つといえましょう。

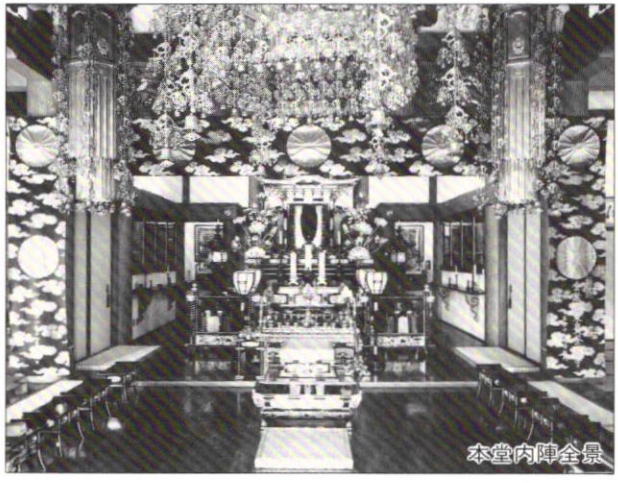
しかし、文政七年（一八二四）に刊行された『金川砂子』の金藏院の記述は

「勅願祈願の霊場、真言の古刹に於てハ又近郷に双びなし」

と記し、威勢のほどをあらわしています。

天保四年（一八三三）二月八日、高野山光恩寺桜地院の三十四世・実仁阿闍梨より、金藏院へ興教大師（覚鑁）画幅が寄進されました。

寄進状の写しによると、実仁阿闍梨が文政末年に金藏院を訪れ、時の住職・戒範法印に親しく接したことを喜び、明五年（一八三四）は、宗祖弘法大師の一、〇〇〇年忌にあたることから、金藏院に興教大師の画幅を寄進する旨記してあります。



本堂内陣全景

弘化二年（一八四五）九月、金藏院は仁和寺宮直院家の大護院憲壽法印道本上人（十八頁参照）より白銀五十枚の寄進を受けました。寄進状の写しが残されていますが、梵鐘鑄造のために寄進されたことがわかります。

嘉永五年（一八五二）五月十日、金藏院は醍醐三宝院家跡・称名院を兼務し、いわゆる院室兼帯寺院（十八頁参照）となりました。

この院室兼帯には僧個人にあてられた一代院室兼帯と、寺院にあてられた永代院室

兼帯とにわかれますが、金藏院は永代院室兼帯寺院であり、寺格として与えられたものです。

五月十七日、醍醐寺座主は金藏院本尊宝前へ、菊桐紋章附紫幕と提灯を寄進し、金紋挾箱、赤網代乗輿が許されました。いらい、金藏院は菊紋、桐紋を寺紋とします。

慶応三年(一八六七)、十五代将軍・徳川慶喜が大政を奉還し、翌四年(一八六八)、明治新政府が樹立されます。徳川(江戸)幕府が崩壊したわけです。

この慶応四年一月七日に神奈川宿に火災が起こり、熊野三社大権現が類焼しますが、金藏院の罹災の記録はなく、諸堂宇の焼失は免れたものと思われます。

昭和初年頃の金藏院

三月、明治新政府が神仏分離令を発布すると、全国に廃仏毀釈運動が広まり、多くの仏像や寺院が破壊されました。

金藏院境内の学寮・宝藏坊の廃絶もこのおりのことと思われます。

明治四年(一八七一)一月には「社寺上知令」が発布され、除地となっていた境内地はすべて官有地として没収され、外くの寺院が廃絶、または無住寺となり、新政府を慌てさせる一幕もありました。

金藏院も朱印寺領地はすべて没収されたうえ、熊野三社大権現の別当職をとかれ、宗教活動にまで支障を来す状態に陥ります。

明治十一年(一八七八)、真言宗は新義・古義に分立し、各々管長を設置することになり、金藏院は新義(智山)に属し、智積院と本末関係を確立しました。このころの金藏院は、末寺数か寺を兼務していたようです。

明治三十八年(一九〇五)、日露戦争が終わると、全国的に庶民信仰が隆昌します。江戸時代のいろいろな巡拝路が復活されるとともに、新しい巡拝路(十七頁参照)も設けられました。

大正五年(一九一六)、金藏院は客殿・庫裡などを新築しますが、十二年(一九二三)の関東大震災で一部損壊してしまいます。

江戸時代の初期、徳川家康が寵愛し、自ら一枝を手折っていったという紅梅も、残念なことに昭和二年(一九二七)に枯死してしまいました。

家康の故事にならって、毎年季節になると金藏院の住職が江戸城へ登って歴代将軍に献上した紅梅で、現在、本堂右手前に植えられた紅梅は三代目のものです。

この年、金藏院は庫裡を再建し、翌三年(一九二八)には鐘楼堂が再建されました。

ところが昭和十六年(一九四一)に太平洋戦争が勃発し、物量に劣る日本は軍部の意志によって、諸寺院の梵鐘や銅像の供出を命ぜられ、金藏院は丈六阿弥陀像と嘉永五年に鑄造した梵鐘を供出しました。

この丈六阿弥陀像は明治期に造立され、大正初期に安置されました。昭和初期に撮影された写真によると、本堂の右手に安置された坐像であることがわかります。

また梵鐘の銘の写しだけが残されていますが、それによると末寺八か寺、門徒寺十一か寺の名が見え、駿河国(静岡県)江尻に住む鑄物師・山田六郎左衛門藤原種秀が治鑄したと記しています。

昭和二十年(一九四五)五月二十九日、横浜地域一帯は米軍機による空襲禍で灰燼と帰し、金藏院も諸堂宇のことごとくを焼失してしまいました。時の住職・山内寛悦僧正も遷化されました。このおり、一切の旧記も焼失してしまいました。

同年八月、忌わしい太平洋戦争は終わりましたが、人びとはその日の糧を求めるために駈けまわり、疲れ果て、殺伐とした世情が日本全土を被っていました。明日への夢をもつなどということは、正に夢のまた夢といった時代でした。

その混乱の時期に法灯を高く掲げたのが五十五世・隆敞法印です。檀信徒の「心の寄る辺」としての寺容をとり戻すべく発願し、まず瓦礫の整理からとりかかったと伝えられています。

無縁仏堂ご本尊

昭和三十五年(一九六〇)檀信徒の皆さまのご協力によって庫裡が完成し、四十二年(一九六七)本堂の再建、四十三年には山門の再築が成り、四十四年十一月、遂に本堂落慶法要が厳修されました。

昭和四十九年(一九七四)に入り客殿が完成し、弘法大師生誕一、二〇〇年記念として、境内に修行大師像を造立しました。隆敞法印は五十九年の弘法大師一、一五〇年御遠忌供養塔の造立まで発願しておりましたが、五十八年十二月十四日、こころざし半ばで示寂されました。

まさに現代における金藏院中興の祖と称しても過言ではありません。

昭和六十二年(一九八七)、金藏院は勝覺法印によって開創されていらい、九〇〇年を数えました。

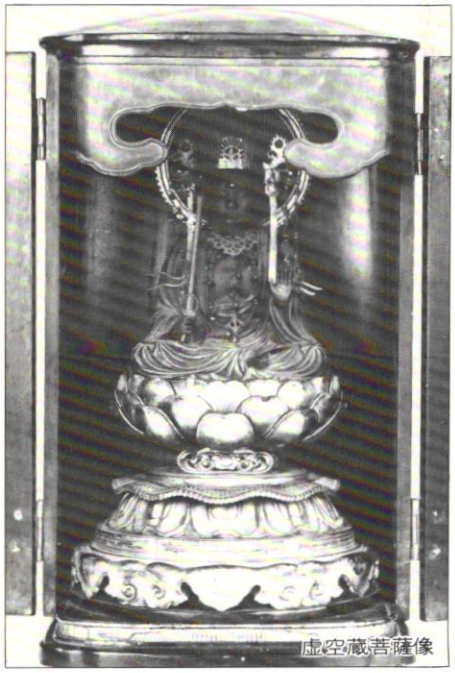
その間、一度として法灯を絶やすことなくともしつづけてきた、文字通り「近郷にならびなき旧刹」といえましょう。

庶民信仰と金藏院

阿弥陀如来像

金藏院のご本尊は阿弥陀如来立像です。阿弥陀如来は、本質的には大宇宙の真理をあらわす大日如来であり、無量寿如来、無量光如来ともいいます。阿弥陀経に、「阿弥陀如来の光明は無量であって十方の国土を照らす」「阿弥陀如来の浄土に生まれるものは、寿命無量である」とあることから出たといいます。無量寿経によると、阿弥陀如来も釈迦と同じくインドの王族の太子で、出家ののち法蔵菩薩となりました。そのおり四十八の大願をたて、その大願を成就して仏となり、西方極楽浄土の教主となったといいます。

四十八願のうち第十八願の念仏往生願は、もっとも大切なもので「弥陀の本願」といい、念仏を行う者は、必ず往生させるという誓いなのです。


虚空蔵菩薩像

虚空蔵菩薩像

本堂精霊段に虚空蔵菩薩が安置されています。虚空蔵とはその広大無辺の功徳が虚空(大空)のように大きいという意味です。

この虚空蔵菩薩は、奈良時代から智慧の仏として、慈悲の地蔵菩薩とならんで、庶民の厚い信仰が寄せられました。

虚空蔵信仰の広まりとともに、その性格を拡大して、五智如来の変化として五大虚空蔵菩薩が生み出され、とくに平安時代に造像が盛んであったといわれています。

修行大師像

弘法大師(空海)が諸国巡錫する姿を刻した像を修行大師像といいます。

巡礼をはじめ、旅の聖に属する人たちは霊性を伴った異人として庶民から受けとめられていました。つまり「まれびと」であり彼らはさまざまな奇蹟を起こしたと伝えられ、その背後には必ず弘法大師のお姿が浮かんでいました。全く無名の旅の僧であっても、伝説の上では、あれこそ弘法大師の化身であったと説かれることによって、次第に信仰として成立していったのです。

「弘法清水」の伝説のように、みすぼらしい身なりの旅の僧を心よく迎えた村では、その僧のついた錫杖の下から滾滾と霊泉が湧き、逆に不親切にしたところでは、かれが錫杖をついた途端、清水の湧きが止まってしまったといいます。

弘法大師は冬至のころの晩に村々を訪れるといい、大師講を催す農村が現在も多く残されています。

農地をうるおす池や溝など、水に関する伝説が顕著であり、真言密教僧が各地に伝播するとともに、庶民らと共にあったことを物語っているといえましょう。

弘法大師の威徳をしのぶ伝説の大半は、当時の状況から考えても真言密教僧の足跡であるとともに、弘法大師の遺徳のあらわれというべきでしょう。

修行大師像

弘法大師1150年
御遠忌供養塔

金藏院の境内には、昭和四十九年（一九七四）弘法大師生誕一、二〇〇年記念として造立された修行大師像が安置されています。これは五十五世・隆敞法印の発願により造立されたもので、隆敞法印は五十九年（一九八四）の弘法大師一、一五〇年御遠忌供養塔の造立をも発願しておりましたが、完成を見ず、五十八年十二月十四日示寂されました。

新四国 玉川八十八か所霊場巡拝

金藏院は「新四国八十八か所霊場」の第二十番霊場札所で、「玉川八十八か所霊場」の第三番霊場札所に数えられています。

これらの巡拝路は、いずれも昭和期に入ってから構成されたものですが、いずれも川崎大師・平間寺を一番寺として弘法大師ゆかりの古刹をめぐる巡拝路に構成されました。

機会あるごとに参詣しつづけていきたいものです。

地蔵菩薩像

境内無縁仏堂内と堂前に地蔵菩薩が安置されています。

天空を象徴する虚空蔵菩薩に対し、大地の恵みを神格化した菩薩が地蔵菩薩です。

釈迦の入滅から弥勒仏の下生までの無仏時代に、衆生済度をうけもつ菩薩として奈良時代から信仰されてきました。

像容は頭を丸め、身に衲衣・袈裟をまとう僧形で、左手に宝珠をもち、右手に錫杖をもつ立像がもっとも多く、金藏院の地蔵尊もこれに属します。

金藏院雑記

江 戸中期以降の文書によると、金藏院は醍醐三宝院の末寺として開創されたと記しています。金藏院は確かに醍醐三宝院の直末寺でしたが、開創当初は醍醐寺の直末寺で、永久三年(一一一五)十一月二十五日、勝覚法印によって三宝院が開創されるとともに、醍醐三宝院と本末関係を結んだものです。金藏院の開創は、三宝院の開創以前のことです。

金 藏院の山号である東曼荼羅寺とは、堀河天皇の許しを得て称されたものです。

これは真言宗(古義)小野派の大本山であり、門跡寺院である曼荼羅寺(小野随心院)にちなんだもので、東国・武蔵国の曼荼羅寺という意味です。勅願寺であれば当然のことですが、開創当初から門跡寺院に準ずる寺格を有していたことがわかります。

金 藏院は「真言宗関東十一檀林」の一つに数えられていました。

檀林とは談林所であり、鎌倉時代の談議所を起源とするといわれています。『金川砂子』によると、金藏院を「一派檀林の随一也」と記しており、周辺地域随一の檀林であったことがわかります。

この檀林は常法檀林と檀林格とにわけられ、さらに古檀林と新檀林に区別されます。古檀林は中世期いらいの檀林をいい、新檀林は智積院・小池坊(長谷寺)の両能化から免許を受けた檀林をいいます。また檀林格とは一代檀林であり、常法檀林とは永代檀林をさします。金藏院は常法檀林であり古檀林でした。

嘉 永五年(一八五二)五月十日、金藏院は醍醐三宝院家跡・称名院を兼帯することになりました。いわゆる院室兼帯寺院となったわけです。

院室兼帯とは、平安時代に仁和寺などで出家した皇族を院家衆といい、その法脈を継承した住坊を院家といい、さらに仁和寺、大覚寺、勧修寺、醍醐寺は、院家のほかに貴族出身の学侶の坊を置き一山伽藍をつくっていました。院家院室の総数はおよそ数百か院にのぼったとみられています。

しかし、近世初期の仁和寺を例にとると有住院家はわずか十か寺にすぎず、残りは名跡のみの廃寺でした。この廃寺分を地方の有力寺院で兼帯し、外様住侶として法脈継承したのが院室兼帯です。

院室兼帯には、僧個人にあてられた一代院室兼帯、いま一つは寺院に具わる永代兼帯で、金藏院はこの永代院室兼帯寺院でした。

金 藏院境内から「弘安」の文字の見える板碑が発掘されています。

この板碑は鎌倉時代におこり、室町時代には形式化しながらも量的には増加をみ、ほぼ中世にかぎって造立されたものです。

関東では用材として主に緑泥片岩が多用され、延文四年(一三五九)ごろから造立が盛んとなりました。

金藏院の板碑はその初期に属するもので、大変に貴重な資料の一つです。

弘 化二年(一八四五)九月、金藏院住職・憲住法印に、仁和寺直院家・大護院憲壽法印より「白銀五拾枚」が寄進されました。

寄進状によると梵鐘鑄造のためであることがわかります。

この憲壽法印は、近世真言宗(智山)の英匠として、また能書の木鐸として知られる道本上人のことです。道本上人は信濃(長野県)の人で三楽翁と号し、佐渡の小比叡山蓮華峰寺に住して法幢を張った高僧で、その法流は金藏院にも伝わったといわれています。

一説によると道本上人の高弟として道雅と道敬があり、道雅は越前(福井県)の滝谷寺に、道敬は金藏院に住して明治九年(一八七六)八月に遷化したといわれます。

金藏院の過去帳によると、明治九年八月六日に「五十世・憲住法印が示寂」と記載されており、憲住法印と道敬が同一人物であったことがわかります。

ちなみに道本上人は安政四年(一八五七)金藏院にて示寂し、葬られました(大護院では「安政四年七月二十八日、九十歳で示寂。金藏院に葬する」と記録しています)。

金 藏院の境内墓地の一隅に、歴代住職の墓石があります。

開創いらい九〇〇年を数える金藏院ですが、歴代の墓石はほんのわずかしか残されておりません。たび重なる災禍や、昭和二十年(一九四五)の空襲禍によってほとんどが消失してしまい、現在判明している歴代僧の名は、わずか三十余僧です。

「松柏の摧かれて薪となり、桑田の変じて海となるを」

の詩句が思い浮かびます。

法を説き、法を護り、絶やすことなく法灯をともしつづけた歴代僧の名も、時とともに流れ去っていったのです。

慶長九年(一六〇四)七月二十一日、金藏院の両界曼荼羅が、八世・秀禪法印によって重修されたとの記録がありますが、寛治元年(一〇八七)に開創された歴代僧が、江戸時代に入って八代ということはまず考えられません。

ここにいう八世とは、関東に真言宗の教勢が広められたころか、関東十一檀林の一つとして学僧の養育にあたったころの中興、または重興いらいの歴代数と思われます。

金藏院略年譜

天喜　五年（一〇五七）　勝覺法印、左大臣・源俊房の第三子として京に生まる。

応徳　三年（一〇八六）　六月十六日、勝覺法印、師・定賢法印の法嗣となり、醍醐寺第十四世となる。
七月、勝覺法印、義範法印の伝法灌頂を受く。

寛治　元年（一〇八七）　勝覺法印、堀河天皇の勅を蒙り、当山を開創す。東曼荼羅寺の勅額を賜う（『金川砂子』）。
六月十七日、勝覺法印、紀伊国（和歌山県）より熊野権現の神霊を分祀し、神奈川郷の総鎮守・熊野三社大権現（現・熊野神社）を開創す。
当山、別当に補さる。

三年（一〇八九）　四月四日、勝覺法印、父・俊房の外護により、醍醐寺の鎮守として清滝宮を勧請す。

嘉保　三年（一〇九六）　勝覺法印、白河上皇御落飾の戒師をつとむ。これにより勝覺法印を「剃手法眼」とよぶ。

（永長元年）

永久　三年（一一一五）　十一月二十五日、勝覺法印、醍醐寺に三宝院を創建す。
いらい当山は直末寺となる。

四年（一一一六）　勝覺法印、座主職を辞し、東寺（教王護国寺）の第三十八世・長者となる。

天治　二年（一一二五）　勝覺法印、東大寺別当となる。

大治　四年（一一二九）　四月一日、勝覺法印示寂す。寿七十三歳。

治承　四年（一一八〇）　八月、源頼朝、伊豆に兵を挙げ、石橋山に一敗す。
十月、源頼朝、鎌倉に入る。
このおり熊野三社大権現に戦勝を祈願し、当山住職秘法を修す。

文治　元年（一一八五）　壇ノ浦の合戦。平氏一門亡ぶ。

建久　三年（一一九二）　源頼朝、征夷大将軍となり鎌倉幕府を開く。
熊野三社大権現および当山が、鎌倉幕府の祈願所となったと伝えられるのはこの時以降のこと。

七年（一一九六）　この頃、神奈川湊、品川湊とともに殷賑を極む。当山隆昌か。

承久　三年（一二二一）　承久の乱。幕府権力の確立。

文永十一年（一二七四）　文永の役。亀山天皇、諸宗に異国調伏を祈願させる。
勅願寺、幕府の祈願寺である当山も祈禱修法を厳修す。

弘安　四年（一二八一）　弘安の役。諸国寺院、勅により異国調伏を祈禱す。

弘安年中（一二七八～八七）　当山に板碑造立さる。板碑造立の初期に属す。

文和　二年（一三五三）　二代将軍・足利義詮、諸寺に天下泰平の祈願を命ず。当山は足利幕府の祈願所として、

祈願祈禱を修す。

応永　五年（一三九八）　熊野三社大権現、山賊に社祠を焼かれ、のち草祠のみのこる（『江戸名所図会』）。

長禄　元年（一四五七）　太田道灌、江戸城を築く。この頃より真言宗の教勢、関東一円に広がる。当山が古談林として、最も活躍したのはこの頃のことか。

延徳年中（一四八九～九一）　印融法印、三会寺（港北区鳥山）を拠点として、関東に教勢を拡大す。当山もその中核寺院として活動す。

明応　三年（一四九四）　六月、上杉建芳の臣・上田蔵人により熊野三社大権現再興。旧観に復すという（『熊野神社由緒記』）。

四年（一四九五）　北条早雲（伊勢新九郎、後北条氏）、小田原城に入る。

永正　七年（一五一〇）　七月十一日、権現山合戦。熊野三社大権現、兵火に罹り灰燼と帰す（『北条記』）。

永禄　七年（一五六四）　五月十三日、当山所蔵の「両曼荼羅」修復す。

天正　五年（一五七七）　六月、賢恵法印、郷民の外護により熊野三社大権現の社殿を修復す。この頃、後北条氏降昌。当山、祈願所として外護を寄せらる。

十年（一五八二）　甲斐武田氏亡ぶ。七月、徳川家康、後北条氏と戦うおり、源頼朝の故事にならい、当山住職（賢恵法印か）戦勝祈願の秘法を修す。

天正十八年（一五九〇）　家康、戦勝ののち、当山へ寺領地十石を賜う。小田原城落ち、後北条氏亡ぶ。家康、関東八州の領主として江戸へ入部す。

十九年（一五九一）　江戸を中心とした古社寺に朱印状を出す。

慶長　四年（一五九九）　二月十日、当山「先規にのっとり」寺領地十石の朱印状を賜う。のち代々の住僧、正月五日に登城し、歴代将軍に「御礼言上」す。塔頭・宝蔵坊の建立はこの頃のことか。

五年（一六〇〇）　関が原の役。東軍大勝す。

八年（一六〇三）　家康、征夷大将軍となり、江戸幕府を開く。

九年（一六〇四）　七月二十一日、秀禪法印、「両曼荼羅」重修す。その由来によると当山八世とあり、中興よりの歴世数と思われるが、中興の年月つまびらかならず。

十五年（一六一〇）　神奈川宿（もと神奈川区駿河町）に、将軍家の宿泊所を建立す。それまでは当山が、家康、秀忠、幼少の頃の家光らの宿泊所となる。

十八年（一六一三）　五月、幕府、「三宝院法度」を制定す。当山、古談林。

元和　元年（一六一五）　大坂夏の陣。幕府、「諸宗諸本山諸法度」を

制定す。
当山、あらためて醍醐三宝院の直末寺となり、末寺・門徒寺二十五か寺を擁す。
元和　二年(一六一六)　幕府、家康の病平癒を諸寺に命ず。当山、幕府の祈願所として祈禱を修す。
家康歿。七十五歳。
寛永　四年(一六二七)　諸宗僧侶の位階を制定す。
八年(一六三一)　同十年の二回にわたって諸宗本山末寺帳を提出す(現存)。
十二年(一六三五)　参勤交替制の確立。
寺社奉行所設置さる。
十七年(一六四〇)　幕府、宗門改役を置き、宗門人別帳を作る。
寺請制度の確立。
十八年(一六四一)　「寛永の大飢饉」。当山周辺も疲弊す。
承応　元年(一六五二)　幕府、年頭祝儀に参上する寺院を制限す。当山は慣例として毎年正月五日に参上す。
万治　二年(一六五九)　五月十三日、当山梵鐘新鑄す。銘文に「秀整」法印の名刻さる。
貞享　四年(一六八七)　幕府「生類憐みの令」布告す。当山、古跡寺院、古談林。
元禄年中(一六八八～七〇三)　庶民生活一応安定し、庶民信仰隆昌す。
正徳　二年(一七一二)　六月、権現山山上、逐次崩壊す。熊野三社大権現を当山境内に遷座し、旧地に小祠を奉安す。石の鳥居を建立。
享保　元年(一七一六)　紀州・徳川吉宗、八代将軍となり「享保の大改革」を行う。
享保　六年(一七二一)　十一月十五日、喜連川前左衛門尉の信施により、境内に世継大師像造立す。
十九年(一七三四)　弘法大師九〇〇年忌。「真言寺院法筵を設く」(『武江年表』)。
宝暦十三年(一七六三)　江戸府内に「弘法大師八十八か所霊場巡拝」設けらる。これを機に各地に巡拝路設置さる。
天明　二年(一七八二)　「天明の大飢饉」始まる。
四年(一七八四)　弘法大師九五〇年忌。真言宗各寺院、大法会を修行す。
享和　三年(一八〇三)　六月、『門末議定連印書』を提出す(当山所蔵)。
文化　九年(一八一二)　十一月四日、「保土ヶ谷、神奈川大地震」起こる。当山の鐘楼堂が倒壊し、万治二年(一六五九)鑄造の梵鐘が破壊す。
文政　四年(一八二一)　旱害により神奈川宿大凶作。神奈川に大風害。特に神奈川宿周辺各村の被害甚大。
六年(一八二三)　『金川砂子』上梓さる。当山、熊野三社大権現の挿絵、略縁起を記載す。
七年(一八二四)　『寺社書上』を提出す。「末寺八か寺、門徒寺十一か寺」との記載あり。
十年(一八二七)　三月八日、高野山光恩寺桜地院三十四世・實仁阿闍梨より、当山へ興教大師(覚鑁)画幅が寄贈される。
天保　四年(一八三三)　弘法大師一〇〇〇年忌。真言
五年(一八三四)

宗各寺院法会を修行す。
斉藤月岑『江戸名所図会』を上梓。当山、熊野三社大権現の記述あり。

天保　八年（一八三七）
凶作により餓死者多数。当山周辺も例にもれず。

弘化　二年（一八四五）
九月、大護院憲壽法印（道本上人）より、当山憲住法印あてに「白銀五十枚」の寄進受く。

嘉永　五年（一八五二）
五月十日、三宝院家跡・称名院を兼帯し、「院室兼帯寺院」となる。
五月十七日、醍醐寺座主より、当山本尊宝前へ、菊桐紋章附紫幕、提灯、金紋挟箱等が寄贈され、当山歴代僧に「赤網代乗輿」を許さる。

安政　二年（一八五五）
十月、梵鐘を再鋳す。
十月二日、安政の大地震。神奈川宿、全潰四十二家、半潰九十三家。滝の川沿いの当山附近被害甚大（『被害書上』）。

四年（一八五七）
憲壽法印（道本上人）当山において示寂し、当山に葬る。
当山、憲壽法印（道本上人）の法流をつたうという。

慶応　元年（一八六五）
十月、当山諸堂宇建立す。

四年（一八六八）
一月七日、神奈川宿火災。熊野三社大権現類焼す。

（明治元年）
徳川幕府崩壊。
新政府、神仏分離令を布達す。
全国に廃仏毀釈運動広まる。

明治　四年（一八七一）
社寺上地令の発布（社寺領地の没収）。廃寺、無住寺続出。
宗門人別帳、寺請制度廃止。

十一年（一八七八）
真言宗、新義・古義に分立す。
当山、新義（智山）派に属す。

卅六年（一九〇三）
末寺の吉祥寺を現在地に移転し、当山これを兼務す。

卅八年（一九〇五）
日露戦争終る。庶民信仰隆昌。
多摩川八十八所弘法大師霊場巡拝設置（現・玉川八十八所）。

大正　五年（一九一六）
当山、庫裡・客殿を再建す。

十二年（一九二三）
関東大震災。当山、本堂・庫裡・客殿・鐘楼堂倒壊す。

昭和　二年（一九二七）
「家康公手折りの梅」枯死す。
現代の梅樹は三代目。

三年（一九二八）
七月、鐘楼堂再建。

十六年（一九四一）
太平洋戦争始まる。

十八年（一九四三）
露座の丈六阿弥陀仏像、梵鐘を供出す。

廿年（一九四五）
五月、当山、空襲禍によって諸堂宇すべて灰燼と帰す。
八月、太平洋戦争終わる。

卅五年（一九六〇）
十月、庫裡再建す。

四十三年（一九六七）
七月、本堂再建。

四十四年（一九六九）
十月、山門建立。

四十九年（一九七四）
十一月、本堂落慶供養修行。
客殿再建。

五十九年（一九八四）
弘法大師生誕一二〇〇年記念として修行大師像建立す。
弘法大師一一五〇年御遠忌供養塔の建立。

六十二年（一九八七）
当山開創九〇〇年を迎える。

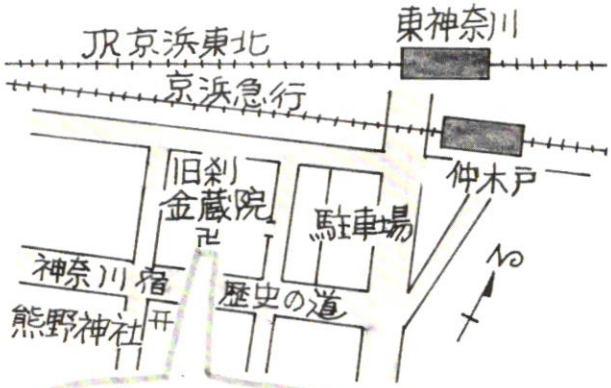
金藏院への径

金藏院を訪れるにはJR京浜東北線・東神奈川駅か、京浜急行電鉄・仲木戸駅から歩くのが一番わかりやすい。

京浜急行電鉄の線路の東側の道を、横浜方向に向かって歩けば二分ほどのところだ。

山門は閉じていることが多いから、東側の通用門から入るといい。南に面して本堂・客殿と庫裡が並んでいる。

本堂は昭和四十二年に再建されたものだが、平安時代に開創された旧刹としての重厚な雰囲気につつまれている。



本堂の前方、南を背にして弘法大師修行像が安置されている。昭和四十九年、弘法大師の生誕一、二〇〇年を記念して造立されたという。

山門前の補装された道が、江戸時代の名所旧蹟を辿る「神奈川宿歴史の旅の道」。

開創いらい九〇〇年を数える金藏院にとって、江戸時代はほんのわずかな「時」にすぎないが、家康をはじめ二代将軍・秀忠や、三代将軍・家光が幼少のころ、金藏院を神奈川宿での宿泊所とし、朱印寺領地十石を賜っていた。

「神奈川宿歴史の旅の道」の中でも、旧蹟中の最たるものといっても過言ではない。

本堂に安置される阿弥陀如来さまに参詣されたい方は、庫裡の方へ声をかけるといい。ご住職が留守のときでも、誰かが必ず案内してくれる。

発行・神鏡山東曼荼羅寺金藏院　神奈川県横浜市神奈川区東神奈川1-4-3　監修・佐伯隆弘　企画制作・映像出版寺史編纂室 03-253-7840

視覺文化
東亞藝術
金藏院